

古文読解力を高め、自ら古文に親しむ生徒を育成する教材の研究

中古を中心とした社会や文化、思想を学ぶための教材群とその系統的配列を通して

佐賀県立武雄青陵高等学校 教諭 寺崎 彩

要 旨

本研究は、古文読解力を高め、古文を通して、自己の考え方や生き方を豊かにすることのできる生徒の育成を目標として行った。その方策として、作品世界を読み解くために必要な「当該時代の社会・文化・思想に関する知識（以下、古文常識とする）」や時代の様相から必然的に導き出され、パターン化された「人物の行動・思考形式や筋形式に関する知識」習得のための教材編成と、それらの知識を文脈推測に活かす方法について探った。この実践で、教師の一方的教授に依らず、生徒自身が読みを直訳レベルから解釈レベル、さらに、鑑賞のレベルにまで高めることができた。

<キーワード> 古文常識 文脈推測力 行動・思考，筋形式

1 主題設定の理由

これまでの古文読解指導では、古語や文法の知識を習得させることに力を注いできた。しかし、直訳ができて、全体の流れを把握して読み味わうことのできない生徒は多い。古文を読解するためには、古語の意味を押さえるだけでなく、主語などの適当な言葉を補いながら、文脈を推測し、作品全体の内容を再構成していかなければならない。その際に必要となるのが「古文常識」や「行動・思考，筋形式に関する知識」である。しかしながら、これらの知識は、生徒の自然習得にまかされており、その習得状況には個人差がある。このことは、教師間で認識されていながら、これらの知識を系統的に学習させることは少なく、授業の中で、場当たりに補足説明をすることが多かった。そこで、これらの知識を系統的に学ぶことのできる教材の選定とその配列について研究し、古文読解指導に語彙指導、文法指導以外からもアプローチを試みることを重要であると考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

古文読解力を高め、古文に対する内発的興味・関心を育てるために、古文常識や行動・思考，筋形式を系統的に学習できるような教材を選定し、それらを身に付けさせるために有効な配列について考察する。

3 研究の仮説

中古を中心とした古文の学習において、古文常識や行動・思考，筋形式を学ぶのに適切な教材を選定し、系統的に学習させれば、生徒の文脈推測力が高まり、直訳から解釈へと読みが深まるとともに、時代性や人間の生き方・考え方についての理解が深まって、古文に対する内発的興味・関心を育てることができるであろう。

4 研究の内容と方法

古文読解指導について、文献や資料を基に理論研究及び先行研究の調査を行う。

諸文献を参考に、中古を中心とした古文常識や行動・思考，筋形式を抽出する。

教科書又は他の文献から古文常識や行動・思考，筋形式を学ぶのに適切な教材の選定と配列を行う。

選定教材を用いて授業を行い、教材の選定と配列の有効性について検証を行う。

5 研究の実際

(1) 古文読解力の構造化

ここでは、中古に多く成立した物語や日記などを読解するために必要な力を構造化することによって、古文読解指導の改善の方向性を探る。物語や日記などを読む際の「直訳」、「解釈」、「鑑賞」という流れを考えた時(図1)、「直訳」では、語訳を基にした内容の粗づかみが行われる。ここで必要な力は、主に語彙力と文法力である。「解釈」では、文脈推測(省略された主語や目的語などを補って、展開や因果関係を推測するなど)に基づき、全体の内容の再構成(主題を把握するなど)が行われる。

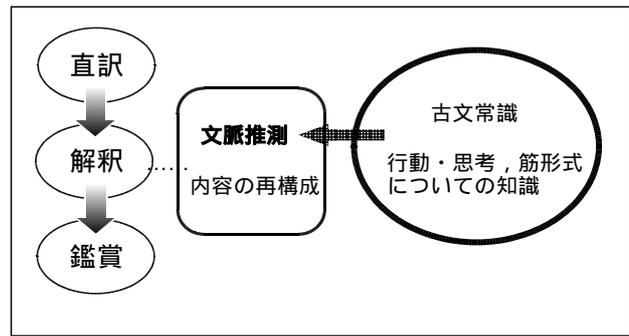


図1 「鑑賞」までの過程

「古文常識」...当該時代の社会・文化・思想に関する知識
 「文学史的知識」...成立時代や作者などについての知識
 「日本史的知識」...歴史上の人物などに関する知識

図2 文脈推測を支える知識

古文読解指導の改善の視点として、この文脈推測を支える知識に着目したい。図2 ~ の知識の中で、文脈推測に特に有効に機能するものが古文常識であると考えられる。文脈推測の際に重要となるのは、作品内における場の状況の把握である。古文常識の習得により、文章中に書かれていない内容であっても、ある場面の中で、その状況や行動に付随して起こる一連の知識(登場人物の立場、標準的な小道具、行動を開始する条件、次の行動を可能にする行動や場面など)が、読み手に的確に復元されれば、すなわち、場の状況の把握ができれば、省略されている主語などの適当な言葉を補って、文章の展開や部分と部分の関係を把握することなどが可能となる。また、古文常識から導き出された時代の様相からパターン化して出てくる行動・思考、筋形式の習得も文脈推測に有効であると考えられる。

生徒自身の古文読解力を伸ばすためには、この「文脈推測力」を身に付けさせることが重要である。さらに、作品内容を現代の視点からとらえ直し、解釈から鑑賞に読みが移行することで、古文に対する更なる内発的興味・関心が育つと考える。

(2) 教材編成論

ア 古文常識項目の設定

高校で学習する古文を読解するために必要なものを、社会、文化、思想という観点から、18項目設定した(表1)。「平安京の作り」はどこまで示すか、小路の1つ1つまで教えるのかという議論はあまり重要ではないと考える。大切なことは、語彙知識ではなく読解に機能する知識を与えるということと、どの常識を教え、どの常識を教えていないかということ教師側が整理することである。例えば、「衣服」については「直衣」で参内する勅許を得ることの意味などの説明を行うようにする。また、授業で取り扱うことのできる教材には限りがあるので、補充学習が必要な常識については、補助資料などを用いて、教師が多様な機会に補足説明を行うようにする。

表1 古文常識一覧表(項目のみ)

項目	番号	内容		
社	身分制度	皇族	帝, 后, 院, 春宮, その他の皇族など	
		臣下	公卿, 殿上人, 国司, その子息など	
	政治の仕組	外戚政治, 人事, 官職など		
会	地理	中央	平安京の作りなど	
		地方	太宰府, 国のランクなど	
文	建物・住居	大内裏・内裏・寝殿・建物内部の構造, 調度類など		
	衣服	衣服の種類や各部位, 色など		
	乗り物	車, 馬, 船など		
	行事	除目, 年中行事, 通過儀礼, 歌合, 物詣など		
	仕事	貴族(参内, 宿直), 女房の仕事など		
	恋愛・結婚	形態, 過程など		
	化	教養	和歌, 漢学, 管弦, 香, 文字など	
		時間	暦法, 時刻, 方位など	
		家族	一夫多妻, 乳母, 兄弟姉妹, 家族関係など	
		呼び名	皇族, 貴族(男性, 女性), 女房, 子どもなど	
思	陰陽道	方違, 物忌など		
	仏教	出家, 仏教思想, 加持祈祷(病気, 出産)など		
	夢	夢占, 夢解きなど		

イ 単元設定と配列

単元は、当該時代の様相が如実に表れた内容を設定した。これも大きな意味では古文常識ととらえてよい(表2)。

配列は、個人的なものから社会的なものへ、若しくは、言葉の省略度、内容の抽象度、古文常識の複合度が増すものに移行するようにした。単元「王朝人の美德」以降は、実在の人物が登場し、人間関係や場の状況の把握が要求され、解釈の難易度が増す。単元「王朝人の美感」では、抽象性の高い随想的内容に触れる。このような文章に徐々に慣れたところで、歌論・俳論などに入っていきとよいと考える。

表2 設定単元と配列

単元名	内容
1 恋愛・結婚	恋愛・結婚の場面において、男女間の身分の相違や女性実家の窮乏によって生じる男女の在り方について
2 京と鄙	距離や文化的格差から生じる鄙としての地方観と京への望郷と憧憬の念について
3 王朝人の美德	「大和魂」を中心とした王朝社会を生きるために必要な能力(男性)について
4 王朝人の美感	女性の視点でとらえた「みやび」の世界、王朝美について

このような文章に徐々に慣れたところで、歌論・俳論などに入っていきとよいと考える。

ウ 教材選定と配列

中古を中心とした物語、日記などの中から、時代の様相からパターン化して導き出される行動・思考、筋形式が認められるものを選定した(図3)。なお、教材と古文常識の対応については次頁表3の通りである。

配列は、行動・思考、筋形式のパターン認識を強化するため、基本の教材、定着の教材、応用・拡充の教材を設定した。と は主教材として、古文常識と行動・思考、筋形式の学習を中心に行うことができるようなもの、は補助教材として、詳細な読解はせず、古文常識や行動・思考、筋形式の応用・拡充をねらいとして紹介程度にとどめるものとした。古文常識を多面的にとらえるためにも、教材は複数化する必要がある。また、単元「恋愛・結婚」の教材「山の井の水」「明石」は単元「京と鄙」への、単元「京と鄙」の教材「門出」と単元「王朝人の美德」の教材「関白殿黒戸より」は単元「王朝人の美感」へのブリッジ教材となるようにした。

ここでは、単元「王朝人の美德」について述べる。この単元では、王朝人(男性)に求められる美德について多様な角度からとらえられるように、教材を選定した。基本教材の「弓比べ」は、王朝人(男性)像を適切にとらえさせるための出発点としての教材、また、外戚政治という政治の在り方を踏まえて、登場人物の人間関係や場の状況を把握した上で読んでいくことの大切さを意識付けさせるための教材である。定着教材「お七夜」は、「弓比べ」で必要とされた古文常識(外戚政治について)を用いて読解をしていく教材である。また、王朝人(男性)像を拡充するための教材として、「弓比べ」「お

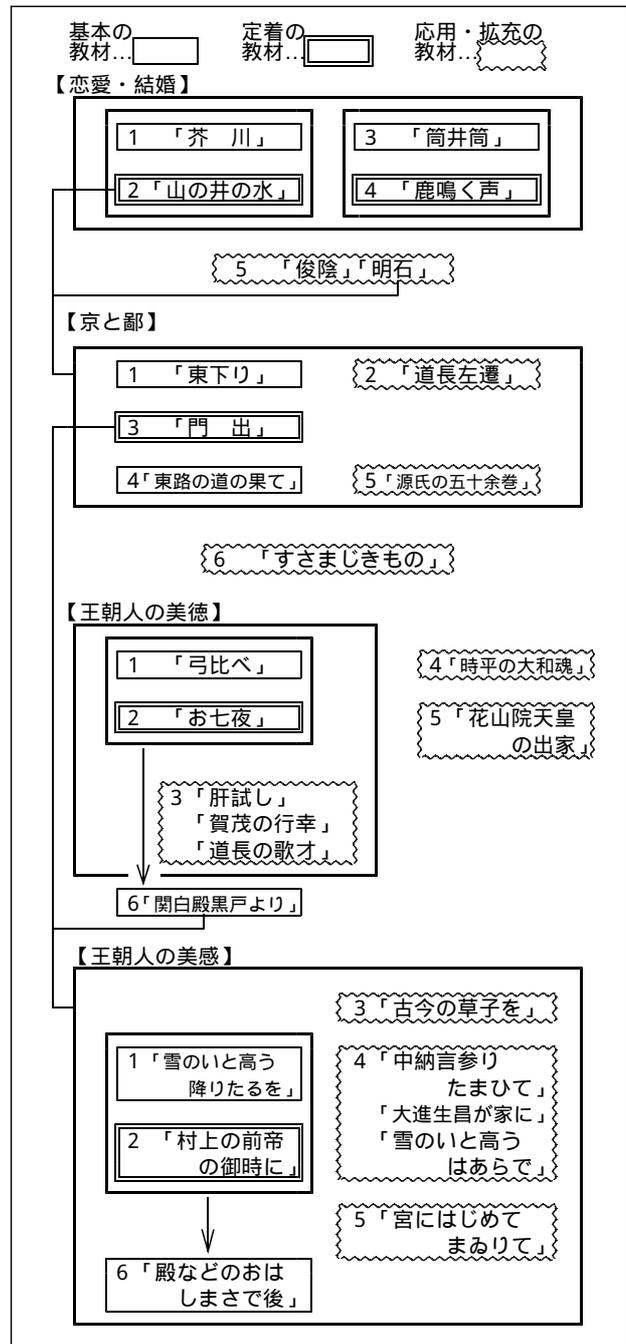


図3 教材編成

七夜」に加え、道長の豪胆さについて描かれた「肝試し」、服装や和歌のセンスについて描かれた「賀茂の行幸」「道長の歌才」を補助教材として選定し、配列した。道長以外の例として「時平の大和魂」、理想からはずれる例として少々強引さの見られる兼家が暗躍する「花山院天皇の出家」にも触れることで、『大鏡』で重要な美德とされている「大和魂」を現代の語感でとらえることのないよう補完するようにした。「関白殿黒戸より」でも、その場の状況に上手に対応する道長の姿が描かれている。また、この教材は、登場人物の人間関係が最も複雑に現れており、難解な文章であるが、ここで定子の実家である中の関白（道隆）家について触れることで、次の単元「王朝人の美感」の主な教材である『枕草子』へとつなげていきたい。

表3 教材と古文常識の対応表

古文常識項目番号の内容については、表1を参照

単元	教材名	出典	古文常識項目番号															
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
恋愛・結婚	「芥川」	『伊勢物語』																
	「山の井の水」	『大和物語』																
	「筒井筒」	『伊勢物語』																
	「鹿鳴く声」	『大和物語』																
	「俊陰」	『宇津保物語』																
	「明石」	『源氏物語』																
京と鄙	「東下り」	『伊勢物語』																
	「道真左遷」	『大鏡』																
	「門出」	『土佐日記』																
	「東路の道の果て」	『更級日記』																
	「源氏の五十余巻」	『更級日記』																
	「すさまじきもの」	『枕草子』																
王朝人の美德	「弓比べ」	『大鏡』																
	「お七夜」	『大鏡』																
	「肝試し」	『大鏡』																
	「賀茂の行幸」	『大鏡』																
	「道長の歌才」	『大鏡』																
	「時平の大和魂」	『大鏡』																
	「花山院天皇の出家」	『大鏡』																
	「関白殿、黒戸より」	『枕草子』																
王朝人の美感	「雪のいと高う降りたるを」	『枕草子』																
	「村上の前帝の御時に」	『枕草子』																
	「古今の草子を」	『枕草子』																
	「中納言参りたまひて」	『枕草子』																
	「大進生昌が家に」	『枕草子』																
	「雪のいと高うはあらで」	『枕草子』																
	「宮にはじめてまゐりて」	『枕草子』																
	「殿などのおはしまさで後」	『枕草子』																

(3) 検証授業の結果と考察

単元「王朝人の美德」の教材「お七夜」を用いて、検証授業を全3時間行った（次頁表4）。単元に入る前に、生徒に王朝人（男性）に対するイメージについてアンケートを行ったところ、「ひ弱」「ぜいたく」など、王朝時代に生きる人々に必要とされた美德としての「洗練された美しさ」「教養」「社交的機知」「胆力」とはかけ離れたものであった。また、それまで説話や『伊勢物語』、『枕草子』の随想的章段を読んできた彼らは、登場人物の人間関係や場の状況の把握が読解に要求される文章を読むことにあまり慣れていないことも分かった。

「弓比べ」を、古文常識：王朝人（男性）像を適切にとらえさせる出発点としての教材、また、古文

常識：外戚政治という当時の政治の在り方などを踏まえ、登場人物の人間関係や場の状況を把握しなければ、読解が困難であるということ認識させるための教材と位置付け、これを定着させるための教材「お七夜」に臨んだ際の生徒の読解について分析し、文脈推測力の変容、文脈理解による読みの深まり、読みの深まりによる主体的・自主的態度の育成について、考察を行っていった。

ア 文脈推測力の変容

(7) 省略主語の推測に見る文脈推測力(教材配列の有効性)

定着の教材「お七夜」の授業の第1時目で、省略されている主語(「まいらせたまふまじき」の主語)を推測する際、古文常識

：外戚政治を踏まえた文脈理解ができたか等について分析した。第1時目で、主語が推測できた生徒は、33人/35人だった(図4)。生徒は、前教材「弓比べ」で、道長と伊周は叔父・甥の関係でありながら、政敵であるということを知っており、これを主語推測の際に役立てることができた。前教材で学んだ、人間関係に留意して登場人物の行動の意味をとらえ、文脈推測に活かすことができたことから、基本教材としての「弓比べ」、定着教材としての「お七夜」という配列の有効性が確認できた。ただ、敦成親王と伊周との関係にまでは考えが及ばない者が多かったため、第2時目に古文常識：外戚政治について補足説明を行った。

表4 「お七夜」の授業の流れ

第1時	直訳を配布し、あらすじを押さえさせる。省略されている主語や目的語や登場人物の行動の意味について考えさせる。「お七夜」における道長に対する初発の感想をもたせる。読解ができなかった箇所を挙げさせる。
第2時	系図、道長と伊周に関する出来事年表、産養の簡単な資料を基に、外戚政治と儀礼について補足説明を行い、場の状況を再現させて主語や目的語を推測させたり、「なかなか心なきことやな」の理由について考えさせる。場面を踏まえた上での「お七夜」における道長の人物像に迫る記事を書かせる。
第3時	記事を読み合わせ、級友の記事についてコメントさせる。「やまとだましひ」について紹介する。

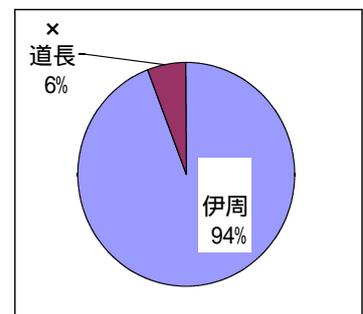


図4 省略主語の正答率

「まいらせたまふまじき」の主語

(1) 解釈に見る文脈推測力の変容(古文常識の有効性)

第1時目で、直訳を読んでも理解ができなかった箇所を各自に出させることによって、読解への動機付けを行った。このような活動の後、第2時目に古文常識(通過儀礼):「産養」についての簡単な説明資料を与えたり、古文常識：外戚政治の仕組みについて再度、補足説明をするなど、古文常識を習得させた後で場の状況を再現させることで、文脈理解が生徒自身で可能になったことがその発言から見取ることができた(資料1)。これによって、登場人物(伊周)に対する作者の評「なかなか心なきことやな」について解釈できた者は、9人/35人(第1時目)から24人/34人(第2時目)になった(次頁図5)。

イ 文脈理解による読みの深まり(解釈から鑑賞へ)

道長の態度に対する第1時目の感想は、「優しい」「心が広い」「思いやりがある」など道長の性格的特質について述べている者が最も多かった。これは「すさまじからず」の語意「冷たなく」から出てきたものと思われる、この時点で生徒は直訳レベルでの読みをしていると言える。しかし、古文常識などを用いて場の状況把握が

資料1 場の状況を再現させる発問

T:	敦成親王の誕生は伊周にとってどんな出来事だったでしょうか?
S1:	甥の誕生です。
T:	これは嬉しい出来事? 悲しい出来事?
S2:	嬉しいことです。
T:	伊周には敦成親王より近い親王がいるよね。第一皇子の敦康親王、伊周の甥です。敦成親王はいとこの子で、第二皇子。伊周にとって、この男皇子の誕生は、本当に嬉しいことかな?
S3:	悲しいことです。
T:	なぜですか?
S4:	自分の甥が天皇になれないからです。
T:	「本体は参らせたまふまじき」の主語は誰でしょうか?
S5:	帥殿です。
T:	なぜ、参上しないのが当然なのでしょう?
S6:	体裁が悪いことだからです。
T:	この場面の場所はどこでしょうか?
S7:	...
T:	敦成親王のお母さんは影子ですよね。この当時、出産はどこでするのでしょうか?
S7:	道長の家です。
T:	ここに集まっている人々はどんな人たちでしょうか?
S8:	偉い人たちです。
T:	親戚や知人が集まっていますよね。もちろん偉い人たち、貴族たちです。その貴族たちの中でもこの敦成親王のお七夜に集まる人たちはどんな人たちでしょうか?
S9:	道長を応援している人たちです。
T:	そんな場に伊周がやって来て、彼らはどんな目で伊周を見ていたのでしょうか?
S10:	何しに来たんだろう。
S11:	こわがっている。
S12:	軽蔑の目で見ています。

できた第2時目では、「策士」「頭がいい」「器が大きい」など道長の態度を知力という能力的特質ととらえた者が最も多かった。また、「余裕」「自信」など(図6「その他」)ととらえた者もあり、登場人物の立場を踏まえた解釈レベルの読みができた者が増加した。さらに、道長の態度に対して、「計算高い」「ずる賢い」など(図6「その他」)意図的なものを感じると言及した者や、「相手の立場に配慮ができる、場の空気が読めるような人が出世できたのだろう」など、武力によってではなく、知力によって政治力を発揮する平安王朝における男性貴族の在り方に考えが及んだ者もあり、現代の視点から作品をとらえ直すことができた者もいた。

ウ 読みの深まりによる主体的・自主的態度の育成

第1時目で各自に疑問点を意識させた上で、第2時目に入ったことで、読解への動機付けができ、生徒が主体的に古文を読もうとする態度が見られた。また、古文常識についての理解や、生徒一人一人の読みが解釈から鑑賞に移行したことで、第3時目には、古文に対する内発的興味・関心が生まれ(資料2)、古典に関する本の読書率も高まった(図7)。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

この研究を通して、古文常識習得が生徒の文脈推測力向上に有効であるということと、基本の教材、定着の教材、応用・拡充の教材という配列の有効性が確認できた。さらに、直訳から解釈、解釈から鑑賞に読みが移行することで、古文に対する内発的興味・関心が生まれることも明らかになった。教師は、生徒がこのような状態になったところで、古典の世界と現代との接点について話をしたり、古典に関するホームページのサイトや本の紹介などに努める必要がある。

(2) 今後の課題

今後は、他の3つの単元「恋愛・結婚」「京と鄙」

「王朝人の美感」についても考察をする必要がある。さらに、中古以外の時代に成立した作品を読むために必要な力についても検討し、教材の選定と配列についても考えていきたい。

《参考文献》

- ・ 文部省 『高等学校学習指導要領 国語編』 平成11年 東洋館出版社
- ・ 渡辺 春美著 『国語科授業活性化の探求 古典(古文)教材を中心に』 平成10年 溪水社
- ・ 佐藤 公治著 『認知心理学からみた読みの世界 対話と協同的学習をめざして』 1996年 北王路書房

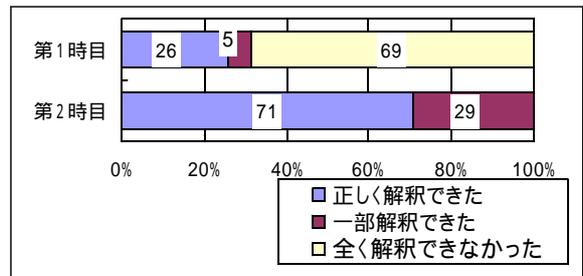


図5 「なかなか心なきことやな」の解釈の正答率

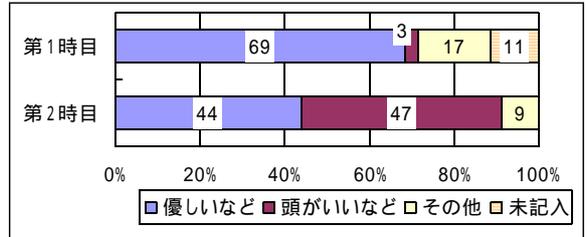


図6 読みの深まりによる道長像の変容

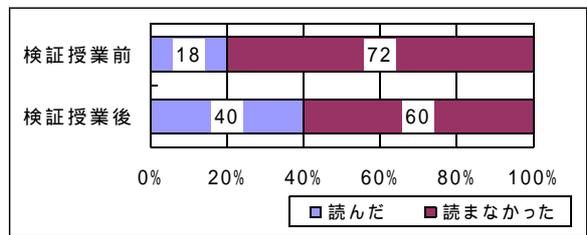


図7 古典に関する本の読書率

資料2 事後アンケートより

- ・ 今と昔では当然のことながら慣習などが違っているのだな、と改めて感じました。今の人が聞くときと驚くような慣習などがなく少し興味があります。
- ・ これからの道長・伊周の関係、また、その子孫の関係を知りたいので、機会があれば他の本も読みたいと思います。
- ・ 昔の人々は、本当は道長のことをどう思っていたのかなと思った。他の古文も読んで、昔の人の考え方を知りたいと思った。
- ・ 道長や伊周の事も関心をもったけど、お七夜にいた人々の本当の思いを知りたくなった。調べようはないけど...。古典の面白さに興味をもちました。
- ・ お祝いについて調べてみたいと思った。